

5 『賢治島探検記2011／東北ツアー版』成井豊（原作／宮沢賢治）

○ストーリー／ある大学のゼミの一行が、街の片隅の小さな空き地にやってくる。ゼミを率いる篠田教授は「ここはが賢治島だ」と主張する。教授は自説を証明するために、学生たちと、宮沢賢治の童話を芝居として上演する。それは、『ゼロ弾きのゴージュ』と『銀河鉄道の夜』。2つの芝居が終わった時、彼らの胸に不思議な風が吹く。

○出演者／男女を問わず計9

○上演時間／60分

登場人物

坂口教授  
大内助手

畑中君（大学生）

岡内さん（大学生）

真柴さん（大学生）

温井さん（大学生）

原田さん（大学生）

市川君（大学生）

岡田君（大学生）

坂口教授がやってくる。周囲を見回し、ポケットからメモ帳を取り出す。

坂口教授　　〇〇県〇〇市〇〇町〇〇。ちょうどこの辺りね。

そこへ、大内助手がやってくる。

大内助手　　坂口教授、やっぱりここに間違いないみたいです。

坂口教授　　ありがとう、大内君。学生たちは？  
大内助手　　今、来ます。（後ろに向かつて）みんな、急げ！

そこへ、真柴さん、岡内さん・温井さん・原田さん・市川君・岡田君がやってくる。それぞれ、トランクやリュックを持っている。

原田さん　　坂口先生、ちょっと休憩にしませんか。私、喉が乾いちやって。

岡内さん　　その自販機で、お茶でも買えば？  
温井さん　　何言ってるの。今、授業中よ。

原田さん　　（坂口教授に）さっき、マックがありましたよね？　私、マックのクオーターパウンダーには目がないんです。

温井さん  
原田さん  
真柴さん  
原田さん  
真柴さん  
温井さん  
真柴さん  
温井さん  
岡内さん  
真柴さん  
岡内さん  
坂口教授  
原田さん  
坂口教授  
原田さん  
坂口教授  
真柴さん  
坂口教授

あなた、食事までしたいって言うの？  
（坂口教授に）必ず五分で戻ります。一秒でも過ぎたら、単位はいりませ  
ん。

原田さん、そんなこと、言っちゃっていいの？

大丈夫です。五分あれば、十個まで行けます。

そういうことじゃなくて、あなた、先月の発表、大失敗したでしょう？

ただでさえ単位が危ないのに、食事がしたいなんてよく言えるわね。

あら、そういう真柴さんはどうなのよ。

どうって？

私、見てたわよ。その自販機で、サッポロ黒ラベルを買ったの。

え？信じられない。

大学からここまで、何分歩いたと思う？ 三十分よ。マラソン選手だって、

三十分も走ったら、給水するでしょう？

でも、ビールは飲まないでしょう。

皆さん、私のゼミの研究テーマは宮沢賢治です。ということは、皆さんは

宮沢先生に興味がある。間違いないですね？

ええ。

原田さんは宮沢先生の作品が好きですか？

はい。初めて『銀河鉄道の夜』を読んだ時は、涙が出ました。

真柴さんは？

私は、作品そのものより、賢治の生き方が好きです。自分以外の人のため

に必死で働いて。  
だったら、考えてみてください。もしここに宮沢先生がいたら、皆さんの

真柴さん  
ことをどう思うでしょう。  
もつとまじめにやれって怒るかもしれないね。でも、昔と今じゃ、時代  
が違うし。

坂口教授  
宮沢先生は宮沢先生、私は私ってことですか？

石川さん  
そうは言いませんけど。  
坂口教授、一人足りません。

大内助手  
え？

坂口教授  
ゼミのメンバーは六人、教授と私を入れたら八人。それなのに、ここには  
七人しかいません。

温井さん  
でも、大学を出る時は八人いたはずですよ。  
わかった。きつと一人でクォーターパウンダーを――

原田さん  
あなたは黙ってなさい。  
誰だ？ 誰がいなくなったんだ？

岡内さん  
わかった。畑中君ですよ。

大内助手  
え？  
何よ。畑中のやつ、また、単独行動？  
違いますよ。あいつ、荷物が多いから、歩くスピードが遅くて。

市川君  
(奥を見て) あ、やつと来た。

真柴さん  
そこへ、畑中君がやってくる。リュックやトランクを山のように抱えている。

畑中君  
ああ、やつと追いついた。  
遅いぞ、畑中。

大内助手

畑中君　　こんな荷物を持たされたら、速く歩けませんよ。  
真柴さん　自分で持つて言ったんでしょ？　かよわい女性に、こんな重い物を持

畑中君　　僕は岡内さんだけに言ったのに。

真柴さん　私は女性じゃないって言うの？

畑中君　　女性であることは認めますけど、かよわいかどうかは……。

温井さん　そういうことを言うから、苛められるのよ。

大内助手　坂口教授、これで全員揃いました。

坂口教授　　ありがとう、大内君。皆さん、今日の目的地はここです。〇〇県〇〇市〇

大内助手　　〇町〇〇。私の研究によれば、賢治島はここにあります。

大内助手　　全員で、この辺りを探してみよう。十五分後に、もう一度集合をかける。それじゃ、解散。

真柴さん・岡内さん・温井さん・原田さん・市川君が舞台上を探し始める。そこに、岡田君が加わる。

畑中君　　あの、探すって、何を？

坂口教授　　賢治島です。

畑中君　　ということは、『賢治島探検記』は、賢治島で探検する話じゃなくて――

大内助手　　賢治島を探す話だ。決まってるだろう。

坂口教授　　（畑中君に）このことは、四月の最初の授業で言っておいたはずですよ。

畑中君　　あなた、何を聞いていたんですか？

畑中君　　バイトが忙しくて、あんまり授業に出てないんで。

大内助手

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

坂口教授

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君

坂口教授

岡内さん

温井さん

原田さん

たまに出てても、推理小説ばかり読んでるし。だから、単独行動の畑中なんて呼ばれるんだよ。

僕のことより、賢治島のことです。賢治島っていうからには、やっぱり島ですよね？ でも、ここは池袋ですよ。池袋に島はないでしょう。

ランゲルハンス島はどこにありますか？

ランゲルハンス島？

ランゲルハンス島は、人の体の中にあります。臍臓の中で、インスリンやグルカゴンなどのホルモンを分泌しています。

(畑中君に)わかりましたか？

それはつまり、こういうことですか。賢治島は、マウイ島やオアフ島や佐渡島みたいな、海に浮かんでいる島ではないと。

イーハトーブはどこにありますか？

イーハトーブ？

おまえ、まさか、イーハトーブも知らないのか？

知ってますよ。イーハトーブっていうのは、岩手のことです。宮沢賢治は、自分が生まれた岩手のことを、エスペラント語風に、イーハトーブと呼んでいた。そうですね？

三十点。

『注文の多い料理店』の最新案内にはこう書いてあります。「イーハトーブは一つの地名である。その地点を求むるならばそれは」

「大小クラウスたちが耕していた、野原や、少女アリスがたどった鏡の国と同じ世界の中」

「テパール砂漠のはるか北東、イヴン王国の遠い東と考えられる」

岡内温井原田

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君  
真柴さん

坂口教授

大内助手

原田さん

坂口教授

大内助手

岡内さん

大内助手

坂口教授

畑中君

「じつはこれは著者の心象中に、このような状景をもつて実在したドリムランドとしての日本岩手県である」

三百点。

で、それがどうかしたんですか。

イーハトーブは現実の岩手じゃない。宮沢先生の心の中の岩手なんだ。でも、そのモデルになった場所は、現実の日本に存在したはず。坂口教授は、

それを賢治島と名付けたんだ。

よくわからないなあ。イーハトーブのモデルは、岩手じゃないんですか？

そうとは限りません。

どうして？

なぜなら、宮沢先生は日本中を旅したからだ。作家は自分の行く先々で、

題材を手に入れる。賢治島はもしかしたら、ここかもしれない。

まさか。

坂口先生、これを見てください。（とどんぐりを差し出す）

これは。

どんぐりですね。『どんぐりと山猫』に出てきたやつかもしれない。

坂口先生、この瓶は？（と瓶を差し出す）

大内君。

『注文の多い料理店』に出てきた、香水の瓶だ。

大内さん、この手拭いは？（と手拭いを差し出す）

『セロ弾きのゴーシュ』で、ゴーシュが持ってきたやつだ。きっと。

どうですか、畑中君？

どうって？

坂口教授

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君

大内助手

畑中君

原田さん

畑中君

坂口教授

畑中君

坂口教授

畑中君

坂口教授

これだけ物的証拠が揃えば、文句は言えないでしょう。それとも、まだここが賢治島じゃないと言いつ張りつもりですか？

言い張ります。賢治島じゃないって。さすがは単独行動の畑中。だって、これはただのどんぐりですよ。どんぐりなら、どこにだって落ちてます。

そうだな。でも、このどんぐりは、手拭いと香水の瓶と一緒に落ちていた。こんな偶然はあり得ない。

あり得ます。賢治はたくさん作品を書いている。その中に出てくる物が三つや四つ見つかったからって、驚くことではない。たとえば、僕は今、苹果を持つてる。(とポケットから苹果を出して) これだって、大内さんが見たら――

これは、『銀河鉄道の夜』で、ジョバンニが燈台守もらったやつだ。おまえ、いつの間に拾ったんだ？

拾ったんじゃない。家から持ってきたんです。おやつに食べようと思って。間食すると、太るよ。

僕のことより、賢治島のことです。ここは賢治島なんかじゃない。いや、それ以前に、賢治島なんてものは、この世に存在しないんだ。

いや、存在します。なぜそう言い切れるんです。

存在しなかったら、淋しいからです。

淋しい？ そんなの、理由になってない。

イーハトーブのモデルは、もちろん岩手です。だから、岩手にはたくさん

畑中君

大内助手

畑中君

大内助手

畑中君

坂口教授

岡内さん

坂口教授

九人

の賢治島がある。でも、私たちの住む街にも、きっと賢治島はある。街角を曲がれば、ジヨバンニが駆けてくるかもしれない。裏山に登れば、銀河ステーションがあるかもしれない。そう思えなければ、淋しいからです。その気持ちは僕にもわかります。でも、ここは〇〇ですよ。〇〇にジヨバンニはいない。

そこまで言うなら、仕方ない。坂口教授、そろそろ授業を始めましょう。ここでですか？

そうだ。ここが賢治島かどうか、みんなで確かめるんだ。さあ、準備を始めよう。

でも、確かめるって、どうやって。

岡内さん、トッパッターはあなたです。あなたが拾ったのは、手拭いでしたね？

そうです。『ゼロ弾きのゴーシュ』に出てきたやつです。よし、じゃ、始めましょう。

『賢治島探検記』。

岡内さんがトランクを中央に置き、開く。坂口教授・大内助手・真柴さん・温井さん・原田さん・市川君・岡田君がトランクからリコーダーを取り出す。

畑中君　へえ、懐かしいなあ。リコーダーか。

坂口教授　あなたも一本取ってください。

畑中君　いいんですか？（とリコーダーを取り出して）　僕、リコーダーは得意だったんですよ。『ボギー大佐』なら、今でもすぐに吹けます。

坂口教授　それは、休み時間にしてちょうだい。

畑中君　え？　今は休み時間じゃないんですか？

大内助手　当たり前だ。授業が始まってから、まだ十分も経ってないだろうが。

畑中君　あの、このゼミの研究テーマは宮沢賢治ですよ？　賢治とリコーダーは

何の関係もないと思いますけど。

真柴さん　ところが、関係あるのよね。

坂口教授　ベートーベン作曲、交響曲第六番「田園」、始め。

九人がリコーダーで『田園／第一楽章』を吹く。曲が盛り上がってきたところで、岡内さんが手を叩く。みんなが吹くのを止める。

岡内さん

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ」  
「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてま  
でいるひまはないんだがなあ。今の前の小節から。はいっ」  
「だめだ。まるでなっていない」

坂口教授・大内助手・畑中君・真柴さん・温井さん・原田さん・市川君・岡田君が去る。

岡内さん

「ゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてな  
い。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうして  
もびたつと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひも  
を引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しつかり  
してくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評を  
とるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練  
習はここまで」

そこへ、坂口教授・大内助手がやってくる。

大内助手

坂口教授

岡内さん

『セロ弾きのゴーシュ』  
『ゴーシュ弾かれのセロ』  
その晩遅くゴーシュは何か巨きな黒いものをしよってじぶんの家へ帰って  
きました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋  
で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さ  
な畑でトマトの枝をきったり甘藍の虫をひろったりしてひるすぎになると

坂口教授

大内助手  
坂口教授

そこへ、温井さんがやってくる。岡内さんは去る。

坂口教授

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬はひどいやな」

「何だと」

「これおみやです。たべてください」

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもつてきたものなど食うか」

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから」

温井さん

大内助手 「生意気なことを云うな。ねこのくせに」  
温井さん 「いやご遠慮はありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかな

いとねむられないんです」

大内助手 「生意気だ。生意気だ。生意気だ」

坂口教授 ゴーシユは足ぶみしてどなりましたがにわかに変えて云いました。

大内助手 「何をひけと」

温井さん 「トロメライ、ロマチックシューマン作曲」

大内助手 「そうか。トロメライというのはこういうのか」

大内助手がセロを弾く。坂口教授が『印度の虎狩り』を歌う。途中から、大内助手も歌う。そこへ、畑中君・市川君・岡田君がやってきて、一緒に歌う。

温井さん 「先生もうたくさんです。ご生ですからやめてください」  
大内助手 「だまれ。これから虎をつかまえる所だ」

坂口教授・大内助手・畑中君・市川君・岡田君が歌う。温井さんが倒れる。五人が歌を止める。畑中君・市川君・岡田君が去る。

大内助手 「さあこれで許してやるぞ」

温井さん 「先生、こんやの演奏はどうかしてますね」

坂口教授 セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一

本だして口にくわいそれからマツチを一本とって

大内助手 「どうだい。工合をわるくしないかい。舌を出してごらん」

温井さん  
大内助手  
坂口教授

(舌を出す)  
「ははあ、すこし荒れたね」

セロ弾きはいきなりマツチを舌でシュッとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕いたの何の舌を風車のようになりまわしながら入口の扉へ行つて頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻つて来てどんとぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとしました。

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱のなかを走って行くのを見てちよつとわらいました。それから、やつとせいせいしたというようにぐつすりねむりました。

そこへ、岡内さんがやってくる。温井さんは去る。

岡内さん

次の晩もゴーシュがまたセロをかついで帰ってきました。そしてゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。

坂口教授

それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰か屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

大内助手

「猫、まだこりないのか」

ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかっこうでした。

そこへ、真柴さんがやってくる。岡内さんは去る。

大内助手 「鳥まで来るなんて。何の用だ」

真柴さん 「音楽を教わりたいのです」

大内助手 「音楽だと。おまえの歌はかつこう、かつこうというだけじゃあないか」

真柴さん 「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ」

大内助手 「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、な

きようは何でもないじゃないか」

真柴さん 「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこ

うとこうなくのとでは聞いていてもよほどちがうでしょう」

大内助手 「ちがわないね」

真柴さん 「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一

万云えば一万みんなちがうんです」

大内助手 「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの処へ来なくてもいいでは

ないか」

真柴さん 「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです」

大内助手 「ドレミファもくそもあるか」

真柴さん 「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです」

大内助手 「外国もくそもあるか」

真柴さん 「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますか

ら」

大内助手 「うるさいなあ。そら三べんだけ弾いてやるからすんだらさっさと帰るん

だぞ」

大内助手がセロを弾く。坂口教授が「かつこうかつこう」と言う。真柴さんも「かつこ

うかつこう」と鳴く。何度も何度も。

大内助手 「こら、いいかげんにしないか。もう用が済んだらかえれ」  
真柴さん 「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです」

大内助手 「何だと、おれがきさまに教わってるんではないんだぞ」

真柴さん 「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか」

大内助手 「ではこれつきりだよ」

真柴さん 「ではなるべく永く永くおねがいたします」

大内助手 「いやになっちまうなあ」

大内助手がゼロを弾く。坂口教授が「かつこうかつこう」と言う。真柴さんも「かつこうかつこう」と鳴く。何度も何度も。

坂口教授

ゴ―シュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするのです。

大内助手 「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になっちゃいます」

大内助手が弾くのを止める。坂口教授が口を閉じる。

真柴さん 「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意地ないやつでものどから血

大内助手

「が出るまでは叫ぶんですよ」  
「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしていられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか」

真柴さん

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとですから」

大内助手

「黙れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまうぞ」

坂口教授

するとかつこうはにわかにはびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子にはげしく頭をぶつつけてばたつと下へ落ちました。見ると嘴のつけねからすこし血が出ています。

大内助手

坂口教授

「いまあけてやるから待っていていろつたら」  
ドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたがいきなりかつこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をばつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまうしました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡ってしまいました。

そこへ、岡内さんがやってくる。真柴さんは去る。

岡内さん

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでいきますと、また扉をこつこつと叩くものがあります。

坂口教授

今夜は何が来てもゆうべのかつこうのようにはじめからおどかして追いつてやろうと思つて待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一疋の狸の子がはいってきました。

そこへ、原田さんがやってくる。岡内さんは去る。

原田さん

「こんばんは」

大内助手

「こら、狸、おまえは狸汁ということを知っているか」

原田さん

「狸汁ってぼく知らない」

大内助手

「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベ

原田さん

ジや塩とまぜてくたくたと煮ておれさまの食うようにしたものだ」

大内助手

「だつてぼくの父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行つて習えと云つたよ」

原田さん

「何を習えと云つたんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡んだよ」

坂口教授

「ぼくは木琴の係りでねえ。セロへ合わせてもらつて来いと云われたんだ」

大内助手

「狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。」

原田さん

「それでどうするんだ」

坂口教授

「ではね、『きらきらぼし』を弾いてください」

大内助手

狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手に取つて、わらい出しました。

坂口教授

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ」

大内助手

ゴーシュは狸の子がどうするかと思つてちらちらそつちを見ながら弾き

はじめました。すると狸の子は棒を持ってぽんぽん叩きはじめました。

大内助手がセロを弾く。原田さんが木琴を叩く。坂口教授が『きらきらぼし』を歌う。途中から、大内助手も歌う。

坂口教授 おしまいまで弾いてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。それから

原田さん 「ゴ―シュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅れるねえ。なん

坂口教授 だかぼくがつまづくようになるよ」

大内助手 ゴ―シュははつとしました。たしかにそきる糸はどんなに手早く弾いても

原田さん すこしたつてからでないと音が出ないような気がしていたのでした。

大内助手 「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ」

坂口教授 「ではもう一ぺん弾いてくれますか」

原田さん 「いいとも弾くよ」

坂口教授 ゴ―シュははじめました。狸の子はさっきのようにとんとん叩きながら時

原田さん 時頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来た

原田さん ときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

坂口教授 「あ、夜が明けてきたぞ。どうもありがとう」

狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかにしよっておじぎをすると急いで外に出て行ってしまいました。ゴ―シュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていました。町へ出て行くまで睡って元気を取り戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

そこへ、岡内さんがやってくる。原田さんは去る。

岡内さん

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近くつかれてうとうとしていますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。

坂口教授

「おはいり」

大内助手

と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。

そこへ、畑中君・市川君がやってくる。

坂口教授

そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。

畑中君

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲になおしてやってくださいまし」

大内助手

「おれが医者などやれるもんか」

畑中君

「先生、それはうそでございます。先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか」

大内助手

「何のことだかわからんね。」

畑中君

「だって先生のおかげで、兎さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとあんなに情ないことでございます」

大内助手

畑中君

大内助手

畑中君

大内助手

畑中君

大内助手

坂口教授

畑中君

市川君

大内助手

坂口教授

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな」

「ああこの児はどうせ病気になるならもつと早くなればよかつた。さつきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになつたのに、病気になるといつしよにぴたつと音がとまってもうあとはいくらおねがひしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだらう」

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういふわけだ。それは」

「はい、ここらのものは病気になるるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療すのでございます」

「すると療るのか」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなつて大へんいい気持ちですぐに療る方もあればうちへ帰つてから療る方もあります」

「そうか。よし。わかつたよ。やつてやろう」

「ゴ―シュはいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしまひました。おつかさんの野ねずみはきちがいのようになつてセロに飛びつきました。」

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい」

「いい。うまく落ちた」

「大丈夫さ。だから泣き声出すなというんだ」

「ゴ―シュはおつかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとつてごうごうがあが弾きました。」



りしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。ゴシユはねどこへどっかり倒れてすぐぐうぐうねむってしまった。

そこへ、岡内さんがやってくる。畑中君・市川君は去る。

岡内さん  
坂口教授

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの控室へみんなぱつと顔をほてらして舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴って居ります。大きな白いリボンを胸につけた司会者はいって来ました。

「アンコールをやっていきますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか」

「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです」

「では楽長さん出て一寸挨拶して下さい」

「だめだ。おい、ゴシユ君、何か出て弾いてやってくれ」

「わたしがですか」

「君だ、君だ。さあ出て行きたまえ」

楽長がセロをむりにゴシユに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴシユを押し出してしまいました。ゴシユが舞台へ出るとみんなはそれを見ろというように一そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

岡内さん  
大内助手  
岡内さん  
坂口教授

大内助手

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度の虎狩をひいてやるから」

坂口教授

ゴーシユはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

大内助手がセロを弾く。坂口教授が『印度の虎狩り』を歌う。  
そこへ、温井さん・真柴さん・原田さん・畑中君・市川君がやってくる。

五人

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。

温井さん

ところが聴衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。

真柴さん

ゴーシユはどんどん弾きました。

原田さん

猫が切ながつてばちばち火花を出したところも過ぎました。

畑中・市川

扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

大内助手が弾くのを止める。坂口教授が口を閉じる。

坂口教授

曲が終るとゴーシユはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のよ  
うにすばやくセロをもつて楽屋へ遁げ込みました。すると楽屋では楽長は  
じめ仲間がみんな火事にでもあったあとのように眼をじっとしてひっそり  
とすわり込んでいます。ゴーシユはやぶれかぶれだと思つてみんなの間を  
さつさとあるいて行って向うの長椅子へどっかかりとからだをおろして足を  
組んですわりました。ところが楽長は立って云いました。

岡内さん

「ゴーシユ君、よかったぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり

坂口教授  
岡内さん

本気になって聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。七日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれるんじゃないか、君」  
仲間もみんな立って来て「よかったぜ」とゴーシュに云いました。  
「いや、からだは丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな」

岡内さん・温井さん・真柴さん・原田さん・畑中君・市川君が去る。

坂口教授

大内助手

その晩遅くゴーシュは自分のうちへ帰って来ました。それから窓をあけていつかかっこうの飛んで行ったと思つた遠くのそらをながめながら、  
「ああかっこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒つたんじゃないか  
つたんだ」

坂口教授・大内助手が去る。

坂口教授・大内助手・真柴さん・岡内さん・温井さん・原田さん・市川君・岡田君がやってくる。ごみ箱や鍋を、手やバチやスプーンで叩き始める。そこへ、畑中君がやってくる。

畑中君

あの、皆さん、何をやってるんですか？

真柴さん

坂口先生に言われたのよ。何か、音の出るものを持ってこいって。

畑中君

音の出るもの？ でも、それ、ごみ箱ですよね？

真柴さん

(ごみ箱を叩いて) どう？ 結構、いい音がするでしょう？

畑中君

ええ、まあ。でも、人の家のものを勝手に持ってきちゃって、いいんですか？

真柴さん

大丈夫よ、ゴミ捨て場に捨ててあったんだから。演奏が終わったら、また元に戻すし。

畑中君

演奏？ リコーダーの次は、ごみ箱の演奏をするんですか？

坂口教授

畑中君、あなたはこう言いたいんでしょう？ 宮沢先生とごみ箱に何の関係があるんだって。

畑中君

まさか、あるとは言いませんよね？

坂口教授

もちろん、言いませんよ。でも、このごみ箱、(ごみ箱を叩いて) こうして叩くと、太鼓みたいだと思いませんか？

畑中君  
大内助手

太鼓ですか？ 賢治の作品の中に、太鼓が出てくるやつなんてあったかな。つべこべ言つてないで、おまえも叩け。一番キレイな音を出したヤツには、坂口教授からご褒美が出るらしいぞ。

畑中君

ご褒美って？

大内助手

学年末のテストに、プラス十点。

畑中君

坂口先生、僕の音を聞いてください。

畑中君が品物を叩き始める。九人が品物を叩きながら、『風の転校生』を歌う。歌い終わると、九人がハンドベルを持つてくる。ハンドベルで、『星めぐりのうた』を奏でる。

大内助手・真柴さん・原田さんが去る。畑中君・岡内さん・温井さん・市川君・岡田君が座る。

坂口教授

「ではみなさんは、そういうふうには川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」

岡内さん・温井さん・市川君・岡田君が手を挙げる。

坂口教授

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか」

畑中君

（立ち上がるが、答えない）

坂口教授

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう」

畑中君

（答えない）

坂口教授

岡内さん

坂口教授

畑中君

坂口教授

「ではカムパネルラさん」  
（立ち上がるが、答えない）

「では。よし。このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」  
（うなづく）

「ですからもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんな川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光がある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。これが今日の銀河の説なのです。今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです」

温井さん・市川君・岡田君が立ち上がる。

六人

『光速銀河鉄道の夜』

坂口教授・温井さん・原田さん・市川君・岡田君が去る。大内助手がやってくる。

岡内さん

ジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。家へは帰らず町を三つ曲って大きな活版処の大きな扉をあけました。ジョバンニは入口から三番目の卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人は、

大内助手  
岡内さん

畑中君  
岡内さん

大内助手  
畑中君  
原田さん

畑中君  
原田さん  
畑中君  
原田さん  
畑中君

「これだけ拾って行けるかね」

と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから平たい函をとりだして隅の所へしやがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

ふう。(と汗を拭く)

六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字をいっばいに入れた平たい箱を、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもっておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

岡内さんが去る。原田さんがやってくる。

「ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。」

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの」

「ああ、ジョバンニ、お仕事かひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいいよ」

「今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って」

「お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さんの牛乳は来ていないんだらうか」

「来なかつたらうかねえ」

「ぼく行ってとつて来よう」

原田さん

「あたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行ったよ」

畑中君

「ではぼくたべよう」

「ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとってパンといっしょにしばらくむしやむしやたべました。」

畑中君

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰ってくると思うよ」

原田さん

「どうしてそう思うの」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ」

原田さん

「だけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない」

畑中君

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ」

原田さん

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ」

畑中君

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ」

原田さん

「おまえに悪口を云うの」

畑中君

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ」

原田さん

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ」

畑中君

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」

原田さん

「ああ行っておいで。川へははいらないでね」

畑中君

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ」

原田さん

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一諸なら心配はないから」

畑中君

「では一時間半で帰ってくるよ」

原田さん

「では一時間半で帰ってくるよ」

畑中君

「では一時間半で帰ってくるよ」

大内助手が去る。

原田さん

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。坂の下に大きな街燈が、青白く立派に光って立っていました。牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、

畑中君

「今晚は、ごめんさい」  
すると、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来ました。

原田さん

そこへ、真柴さんがやってくる。

畑中君

真柴さん

「あの、今日、牛乳が僕んところへ来なかつたので、貰いにあがったんです」

畑中君

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい」

真柴さん

「おつかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです」

畑中君

「ではもう少ししてから来てください」

原田さん

「そうですか。ではありがとうございます」  
ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

そこへ、岡内さん・温井さん・市川君・岡田君がやってくる。原田さんが去る。

真柴さん

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、雑貨店の前で六七人の

生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、やって来るのを見ました。ジョバンニは思わずどきどきとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

温井さん 「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ」

温井市川岡田

真柴さん 「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ」

ジョバンニはまっ赤になって、急いで行きすぎようとしましたが、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、ジョバンニの方を見ていました。ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、黒い丘の方へ急ぎました。

岡内さん・市川君・岡田君が去る。真柴さんも去る。

温井さん

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどのぼって行きました。林を越えると、俄かにならんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘っているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わかれたのでした。ジョバンニは、天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

畑中君 あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

温井さん

ところがいくら見ても、そのそらは先生の云ったような、がらんとした冷いところとは思われませんでした。見れば見るほど、小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかったのです。

そこへ、坂口教授・大内助手・真柴さん・岡内さん・原田さん・市川君・岡田君がやつ

てくる。

八人

四人

四人

八人

八人

原田さん

温井さん

真柴さん

大内助手

八人

大内助手・真柴さん・温井さん・原田さん・市川君・岡田君が去る。

岡内さん

畑中君

岡内さん

するとどこかで、

銀河ステーション

銀河ステーション

銀河ステーション

と云う声があったと思うといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗って

いる小さな列車が走りつづけていたのでした。

ジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、

窓から外を見ながら座っていたのです。

すぐ前の席に、子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きまし

た。

その子供が頭を引っ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」

「どこかで待っていたようか」

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えにきたんだ。ああしまった。ぼ

坂口教授

岡内さん  
坂口教授

畑中君  
坂口教授

岡内さん

畑中君  
岡内さん

く、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから」

カムパネルラは、円い板のようになった地図を、見ていました。その中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。

「おや、あの河原は月夜だろうか」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろのすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」

ジョバンニは、まるでねえ上りたいくらい愉快になって、窓から顔を出して、天の川の水を、見きわめようとしました。はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあっちにもこっちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか」

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。

けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう」

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」  
「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると

思う」

坂口教授が去る。原田さんがやってくる。

原田さん

「汽車はだんだんゆるやかに、間もなくプラットホームの前列の電燈があらわれ、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。」

大内助手・真柴さんがやってくる。

真柴さん

「ここへかけてもようございますか」

畑中君

「ええ」

真柴さん

「あなた方は、どちらへ入らっしゃるんですか」

畑中君

「どこまでも行くんです」

真柴さん

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまでも行きますぜ」

岡内さん

「あなたはどこへ行くんです」

真柴さん

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね」

畑中君

「何鳥ですか」

真柴さん

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」

畑中君

「どうしてとるんですか」

真柴さん

「そいつは、雑作ない。川原で待っていて、鷺が下りてくるところを、地べたへつくかつかないうちに、びたっと押えちまうんです。すると鷺は、かたまつて死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にす

るだけです」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか」

「おかしいねえ」

「おかしいも不審もありませんや。そら。ごらんなさい。いまとって来たばかりです」

「ほんとうに鷺だねえ」

二人は思わず叫びました。まっ白に光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、浮彫のようにならんでいたのです。

「鷺はおいしいんですか」

「ええ、毎日注文があります。どうです、少しおあがりなさい」

「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな」

「いいえ、どういたしまして」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう」

鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です」

窓の外の、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとおった球が、輪になつてしずかにくるくるとまわっていました。

そこへ、市川君・岡田君がやってくる。原田さんは去る。

岡田君

「切符を拝見いたします」

市川君

三人の席の横に、車掌が、いつかまっすぐに立って云いました。鳥捕りは、だまって小さな紙きれを出しました。カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっぴりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。何でも構わない、やっちまえと思つて渡しましたら、

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか」

「何だかわかりません」

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります」

車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

市川君  
真柴さん

「こいつは大したもんですぜ。どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね」

畑中君

「何だかわかりません」

岡内さん  
市川君

「もうじき驚の停車場だよ」  
カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云いました。

そこへ、温井さん・原田さんがやってくる。

岡田君

そしたら俄かにそこに、六つばかりの男の子がたがたがたふるえてはだしで立っていました。隣りにはせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれています。

原田さん

岡田君

温井さん

岡田君

市川君

温井さん

市川君

温井さん

大内助手

温井さん

やきの木のよな姿勢で、男の子の手をしっかりひいていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ」

青年のうしろにも十二ばかりの可愛らしい女の子が不思議そうに窓の外を見ていたのでした。

「ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されるのです」

青年は男の子をジョバンニのとなりに座らせました。それから女の子にカムパネルラのとりの席を指さしました。

「ぼくおおねえさんのとこへ行くんだよう」

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていていらっしやったでしょう。早く行ってお目にかかりましようね」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかったなあ」

「ええ、けれど、ごらんなさい、あの立派な川、ね、きれいでしよう」

「あなた方はどちらからいらっしやったのですか」

「氷山にぶつつかって船が沈みましてね、ボートは左舷の方はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈って呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなか居て、とても押しおける勇氣がなかつたのです。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかな

大内助手

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから」

温井さん

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」

大内助手

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう」

温井さん

「おや、どっから来たのですか。立派ですねえ」

大内助手

「いや、まあおとり下さい。さあ、坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい」

岡内さん

「ありがたい」

畑中君

「ありがたい」

大内助手が畑中君・岡内さん・温井さん・原田さん・市川君に苹果を渡す。

岡田君

川の向う岸が俄かに赤くなりました。野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ル

畑中君  
岡田君  
原田さん  
畑中君  
原田さん  
畑中君  
原田さん

「ビールよりも赤くすきとおりリチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。」  
「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう」  
「蝸の火だな」  
「カムパネルラがまた地図と首つびきして答えました。」  
「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ」  
「蝸って、虫だろう」  
「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ」  
「蝸いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螯されると死ぬって先生が云ったよ」  
「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一びきの蝸がいたんですって。ある日いたちに見附かつて食べられそうになつたんですって。さそりは一生けん命遁げたけどどうとういたちに押えられそうになつたわ、そのとき前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、さそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈りしたというの、  
「ああ、わたしはいままでいくつの命をとつたかわからない、そして私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちと呉れてやらなかつたろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。神さま。どうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。そしたらいつか蝸はじぶんのからだが見たつて。ほんとうにあの火それだわ」

岡田君

ジョバンニは三つの三角標がさそりの腕のように五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

岡田君が去る。

温井さん

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい」

市川君

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ」

温井さん

「ここでおりなけあいけないのです」

市川君

「厭だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい」

畑中君

「僕たちと一諸に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持っているんだ」

原田さん

「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから」

畑中君

「天上へなんか行かなくなっていくじゃないか」

原田さん

「だっってお母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ」

畑中君

「そんな神さまうその神さまだい」

温井さん

「あなたの神さまってどんな神さまですか」

畑中君

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもほんとうのたった一人の神さまです」

温井さん

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」

畑中君

「ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さままで

温井さん

大内助手

温井さん

大内助手

原田さん

大内助手

畑中君

大内助手

大内助手・原田さん・市川君が去る。

畑中君

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまで

す」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります」

ああそのときでした。見えない天の川の中から立つてかがやきその上には青ゆる光でちりばめられた十字架が川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環になって后光のようにかかっているのです。

そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすっかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ」

青年は男の子の手をひき向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら」

女の子が二人に云いました。

「さよなら」

ジョバンニは泣き出したいのをこらえてぶっきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こつちをふりかえつてそれからあとにはもうだまって出て行つてしましました。汽車の中は俄かにはらあとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。けれどもそのときはもう汽車はうごき出しと思つてうちに銀いろの霧が川下の方からすうと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。

も一諸に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない」

岡内さん

畑中君

岡内さん

畑中君

岡内さん

温井さん

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう」

「僕わからない」

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」

カムパネルラが天の川のひととを指さしました。ジョバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまつくらの孔がどおんとあいているのです。

畑中君

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行こう」

岡内さん

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ」

温井さん

カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。

畑中君

「カムパネルラ、僕たち一諸に行こうねえ」

そこへ、坂口教授・大内助手・真柴さん・原田さん・市川君・岡田君がやってくる。岡内さんは去る。

七人

真柴さん

原田さん

坂口教授

温井さん

市川君

岡田君

坂口教授

畑中君

坂口教授

畑中君  
坂口教授

「ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらもうカムパネルラの形は見えずジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはいはげしく叫び、それから咽喉いっばい泣きました。」

「もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。」

「おまえはいったい何を泣いているの。」

やさしいセロのような声が、ジョバンニのうしろから聞こえました。

「ジョバンニは、はっと思つて涙をはらつてそつちを振り向きました。」

「さっきまでカムパネルラの座っていた席に黒い帽子をかぶつた大人が、やさしくわらつていました。」

「おまえのともだちがどこかへ行つたのだらう。あのひとはね、ほんとうにこんや遠くへ行つたのだ。おまえはもうカムパネルラをさがしてもむだだ。」

「どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといつしよにまっすぐに行こうと言つたんです。」

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいつしよに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあうどんなひとでも、苹果を食べたり汽車に乗つたりしたのだ。だからやつぱりおまえはさつき考えたように、あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし、早くそこに行くがいい。そこでおまえはほんとうにカムパネルラといつしよに行けるのだ。」

「ぼくきつとそうします。ぼくはどうしてそれをもとめたらいでしょう。」

「ああわたくしもそれをもとめている。おまえは化学をならつたらう、水」



大内助手・真柴さん・温井さん・原田さん・市川君・岡田君が去る。

坂口教授

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。ほの白い牧場の柵をまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。

畑中君

「今晚は」

そこへ、真柴さんがやってくる。

真柴さん

「はい。何のご用ですか」

畑中君

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

真柴さん

「あ済みませんでした」

坂口教授

その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもって来てジョバンニに渡しながらまた云いました。

真柴さん

「今日はひるすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大

畑中君

将早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしまいましたね……」

真柴さん

「そうですか。ではいただいて行きます」

真柴さん

「どうも済みませんでした」

坂口教授が去る。

真柴さん

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。そしてしばらく行きますと町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいずつ集って橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。ジョバンニはまるで夢中かさあつと胸が冷たくなったように思いました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走り下つたりして河原の水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。するといきなりさつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。

そこへ、市川君がやってくる。

市川君

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

市川君

「どうして、いつ」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」

「みんな探してるんだろう」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附かないんだ」

市川君

市川君が去る。

真柴さん

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。学生たち町の人たちに囲まれてカムパネルラのお父さんがまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

そこへ、大内助手・岡内さんがやってくる。真柴さんは去る。

岡内さん

みんなもじっと河を見ていました。川はばーばい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えませんでした。ジョバンニはカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかったのです。

大内助手  
岡内さん

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」  
ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラに行った方を知っています。ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのですと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。

大内助手

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとうございました。」  
ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

大内助手  
畑中君

「あなたのお父さんはもう帰っていますか」  
「いいえ。」

大内助手

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね」  
そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつった方へじっと眼

岡内さん

畑中君  
畑中・岡内

を送りました。ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでお父さんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りまわりました。

そこへ、坂口教授がやってくる。

坂口教授

どうやら、これで証明されたようですね。

畑中君

何が？

坂口教授

決まってるでしょう。〇〇県〇〇市〇〇町〇〇、ここは間違いなく賢治島なんです。

そこへ、真柴さん・温井さん・原田さん・市川君・岡田君がやってくる。それぞれ、トランクやリュックを持っている。

大内助手

坂口教授、おめでとうございます。

六人

おめでとうございます。

坂口教授

ありがとうございます、皆さん。みんな、あなたたちの協力のおかげです。

大内助手

これで、坂口教授が発見した賢治島の数は、四二七になりました。

坂口教授

そうですか。じゃ、ここは、第四二七賢治島と命名しましょう。

大内助手

皆さん、お疲れさまでした。授業はこれで終わりです。この後、用事のない人は、打ち上げに行きましょう。

真柴さん  
原田さん  
坂口教授  
岡内温井原田  
坂口教授  
原田さん  
畑中君  
大内助手  
畑中君  
大内助手  
畑中君  
大内助手  
畑中君  
坂口教授

酒だ酒だ！  
もちろん、坂口先生のおごりですよね？  
待って待って。いくら何でも、この人数では――  
坂口先生。  
ちよつとATMに寄り道してもいい？  
やったー！  
ちよつと待ってください。  
何だよ、畑中。  
僕には全く理解できません。ここが賢治島だなんて、いつ証明されたんです。  
たつた今だよ。  
僕らはここで芝居をやった。ただそれだけじゃないですか。  
そうだな。でも、そのおかげで、わかっただ。石川が拾ったどんぐりは、間違いなく、『どんぐりと山猫』のどんぐりだった。筒井が拾った壺は、間違いなく、『注文の多い料理店』の塩壺だった。おまえだって、そう思っただろう。  
思いませんでした。  
じゃ、その苹果は？ ジョバンニの役をやっている時、それはおまえが家から持ってきた苹果だったか？  
いいえ。あの時は確かに、燈台守がくれた苹果だと思いました。でも、それはあくまでも芝居の中の話です。僕はジョバンニじゃないし、銀河鉄道にも乗ってない。  
いいえ、あなたは乗ったんです。

畑中君  
坂口教授

畑中君  
坂口教授  
畑中君  
坂口教授

畑中君

坂口教授  
温井さん  
真柴さん  
大内助手  
坂口教授  
大内助手  
真柴さん  
市川君  
大内助手

乗ってません。

その苹果を手にした時、確かにあなたはジョバンニだった。あなたはあの  
星空の中にいたんです。

ええ、いました。でも、それは僕の心の問題に過ぎない。

まだわからないんですか、畑中君。私は心の話をしてるんです。

え？

それは、あなたが家から持ってきた苹果です。そんなことはわかりきって  
いる。近所の果物屋で、百円か二百円で買ったんでしょう。ごく普通の、  
何の特徴もない苹果です。宮沢先生が食べていた苹果も、そんな苹果だっ  
たに違いありません。でも、宮沢先生は、そんな苹果を見て、『銀河鉄道  
の夜』を書いたんです。

それはつまり、こういうことですか？ この苹果が普通の苹果か、それと  
も、ジョバンニがもらった苹果か、決めるのは僕の心だと。

私たちはここが賢治島だと思った。だから、ここは賢治島なんです。

坂口先生、そろそろ打ち上げに行きませんか？

みんなで乾杯しましょう。第四二七賢治島発見を祝って。

坂口教授、一人多いです。

え？

ゼミのメンバーは六人、教授と私を入れたら八人。それなのに、ここには  
九人います。

タダ酒にありつこうと思って、誰か紛れ込んだんじゃないの？

わかった。きっと座敷童ですよ。

座敷童？

市川君

畑中君  
大内助手

畑中君

坂口教授

畑中君

坂口教授  
大内助手

坂口教授

岡田君がうなずく。その時、風が吹く。

畑中君

坂口教授

さらに、風が吹く。その風を追いかけて、九人が歩き出す。

賢治の童話に出てくるでしょう？ 人がたくさん集まると、いつの間にか、一人増えてるんです。でも、それが誰だかわからないんです。

バカバカしい。そんなの、嘘ですよ。童話の中だけの話です。

おまえってやつは、まだわからないのか？ 坂口教授があんなに丁寧に話してくださったのに。

だって、おかしいじゃないですか。坂口先生の言う通りにしてたら、日本中が、いや、世界中が賢治島になってしまう。

それでいいんです。それが私の夢なんですから。私は間違っていますか、宮沢先生？

え？  
私は間違っていますか、宮沢先生？

あの、宮沢先生って？  
あれ、畑中。  
私はこれからも、賢治島を探し続けます。それでいいんですね、宮沢先生？

風だ。

あの風を追いかけよう。あの風の行く先に、賢治島はきっとある。